

論文紹介

10 月号で掲載した内容の続きです。発情に関する研究をまとめたレビュー（総説）を紹介いたします。参考にいただければ幸いです。

牛はいつ発情するのか？～臨床と現場の見地から～ その②

（原題：When is a cow in estrus? Clinical and practical aspects）

J.Roelofs ら Theriogenology 74 (2010) 327-344

発情に影響を与える因子

③雄牛

雄牛が存在していると、分娩してから次の分娩に至るまでの期間や、発情から次の発情までの期間が短くなる可能性があります。また雄牛の存在下では、乗駕行動の回数が増加した報告があります。自然発情でなく、プロスタグランジンを用いた同期化処置をした牛でもこの変化が見られました。

④群れの大きさ

群れが大きくなると、それだけ発情の牛のグループが形成されやすくなります。そのため、群れが大きくなると、発情がより強く発現し、発情発見率も高くなります。すなわち、同時に発情がきている牛の数が多いほど、発情発見率が高くなります。これは発情牛が、他の発情がきている牛に刺激されるからかもしれません。

⑤跛行

跛行している牛は、健康な牛に比べて、出産後の発情回帰が最大 24 日遅れます。これは症状の出ていない、潜在的に蹄に問題のある牛にも起こります。また跛行牛は、LH サージの遅れから卵胞のう腫を引き起こしやすくなります。発情の強さを数値化した論文では、跛行牛では平均 37%ほど発情の強さが低下しています。

（この他にも本文中には、発情に影響を与えるものとして品種、分娩後日数、出産回数、泌乳量、ホルモン処理、牛舎構造が紹介されています。）

まとめに代えて

発情発見が重要であることは明らかです。しかし、発情をしっかりと見つけることは、「言うは易し、行ふは難し」といえます。繁殖成績に問題のある農家さんもいれば、全く問題のない農家さんもあります。しかし、問題があってもなくても、「記録を続けていく」ことが一番重要であるといえます。環境、管理、牛など多くの因子が発情に関連します。季節、気候、施設など、簡単には変えられないことと、発情観察の回数、時間や記録することなど、比較的に変えやすいことを意識して、変えやすいところから変えてみることは、発情発見率の向上に有効です。